

障害者の就労を支える

「障害と付き合いながら
僕らは『一生懸命に働く』」

職場での「役割業務」「労働時間」「給料」など、障害の特性や企業それぞれによって違いはあります。しかし、障害の有無にかかわらず同じように働くこと、これは地域社会にとっては大きな課題です。

仕事の上で、障害者にはできないこともあります。しかし、少しの支援があればできることも多いのです。これは健常者と同じです。障害者が地域で生き生きと生活する、そのためにはまず「知る」ことが大切です。

今月号では、働く障害者、雇用する企業、支援機関それぞれに焦点を当てて取材し、特集しました。



中尾悠太さん(20歳・阿那賀)
重度の知的障害をもつ悠太さんは、ホテルアナガの洋食厨房で働き、野菜や魚の下処理・洗い場などを担当します。

広報担当「中尾悠太さんは、職場でどういう存在なんですか。お仕事ぶりはいかがでしょう。」
スタッフ「明るい性格で、中尾君がいることで職場は笑顔が絶えません。仕事は真剣にやっていますよ。やる事がなくなってもぼっっとしていることはないですね。することがないときは、『何かないですか』と必ず聞いてきます。」
一般就労ができた悠太さんは今、職場の仕事と障害の特性とのマッチもうまくいっているといいます。広報担当は、そんな悠太さんにご家族に話を聞いてみました。

職場の同僚と休憩時間に談笑する悠太さん(11月2日撮影)

「中尾悠太さん」

給料は月額6万円

——ホテルで働くことの夢が実現——
自分のため、家族のため、ずっと働いていくための仕事

「一生懸命働くのは、自分がずっと働いていくためやねん。親がいなくなっても働き続けていたい。仕事に行って、お金を儲けて、家族みんなのためにプレゼントをしたい。今まで小さいときから育ててくれた家族へのお礼やから・・・」重度の知的障害を持つ中尾悠太さん(20歳・阿那賀)は、ゆっくりと自分の言葉を紡ぎだしています。

悠太さんは淡路特別支援学校を卒業後、3か月間のトライアル雇用を経て昨年6月末、ホテルアナガ(阿那賀)に就職しました。職場は自宅から自転車で20分。週4〜5日通い、4時間〜7時間働きます。

今の職場との出会いは、支援学校時代の先生に紹介された実習(就労体験)



▲慣れた手さばきで玉ねぎの皮を包丁で剥いていく悠太さん

が始まりで、料理を作るのが好きだった悠太さんにとって、この実習での経験は、「ホテルで働くことの夢」を見つけるきっかけになったといえます。

悠太さんの仕事は、早番の日は午前8時に始まります。仕事の場の更衣室に着くと、悠太さんは母・智恵さんに「着いたよ」と電話を入れます。これは智恵さんによると、「職場に迷惑をかけないための親子の決め事です。ある日、悠太は時間どおり職場の更衣室に着きましたが、時間になっても仕事場に行けなかったんです。『いつ更衣室から出て行ったらいいか分からなかった』。悠太は言っていました。」それ以後、仕事の始めと終わりに、連絡をするようにしています。

入社1年を過ぎた悠太さんの今の仕事は、洋食厨房での料理の下ごしらえなどで毎日が勉強だといいます。「シルバー(ナイフやフォークなど)拭きを早くできるようにしたい。これが今の目標です。ほかに魚の鱗取りやバジル・セロ



悠太さんご家族

悠太は、支援学校に通っている頃から就職を希望していました。私たち家族も給料は少なくてもいいからとにかく働いてほしいという気持ちがありました。これは、障害を持っている子の親の不安でもあります。「グループ(ケア)ホームも近くにない。私たち親がいなくなったとき、この子は一体どうやって生きていくのか。」悠太に障害があると言われてからずっと思っています。

悠太の給料は最低賃金で月6万円前後ですが、働かせてもらっているだけでありがたいと思っています。悠太の周りにいる職場のスタッフが優しく、良い環境で働かせてもらえるのは、本当に感謝しています。

きが苦手という悠太さんは、「調理で使うgやccの単位で分量を量るのが苦手やねん。3〜4までは数えられるけど、僕には教えられるのも無理やねん」といいます。

母・智恵さんは、障害者が働くには、できないことや分からないことに、線引きも必要と話します。「悠太が3歳のとき、町の健診で言葉の遅れがあるといわれました。その後、気になってしばらく県病にかかっていましたが、知能指数が6歳〜7歳までにしかならないと診断されました。普通の人ができることでも、悠太にとっては難しいことがあるんです。ところが、今の職場は、悠太が分かりやすいよう配慮をしてくれる。声をかけて気にもかけていく。帰ってきて、生き生きと毎日の仕事を報告する悠太を見ると、この子にとって一番いい職場なのかなあと思っています。」

「職場の戦力」 障害者の特性を生かす

悠太さんを雇用する機会を作ったホテルアナガの中野匡昭^{ただあき}支配人兼総料理長は、障害者雇用を実践している知人のカフェのオーナーと話さ中で、支援学校の実習の受け入れを考えたと話します。結果的には同ホテルで初の障害者枠の雇用が実現したといいます。

「障害者雇用に抵抗はありませんでした。弊社では障害を意識せずに同じ一人の仲間として扱っています。彼の場合、仕事に対する真面目さや明るく素直な性格のおかげでスタッフとの打ち解けも早かったと思います。」



▲シャンパングラスの曇りをチェックする悠太さん。首にかかっている紐の先には小さなノートがあり、いつも胸ポケットにしまっています。これは入社当初からの中野支配人の指示で、「分からないことや忘れそうなことはメモを取る」という約束になっています



▲本来の意味で障害者が仕事をし、企業も義務や責任ではなく、お互いが必要とする関係になれば話す中野支配人

雇用の際、障害の程度に大きな個人差があることを意識していなかったといいます。そのため、雇用後すぐの頃は、戸惑いもあったといいます。「数字の面で大きな壁があったのです。中尾君には、作ることの喜びをパン作りで知ってもらいたいとの想いがありました。しかし、料理を作る上で必要な足し算や掛け算がどうしてもできなかったのです。」中野支配人は、努力すればできると考え、算数の勉強をさせましたが、

3桁の足し算(筆算)はできたものの、掛け算でぶつかり、中尾さんが「できない」と言う言葉の意味に気付かされたといいいます。

その後、のびのびと仕事をさせる方針に切り替えた今、「中尾君には、健常者なら量を見ただけでもぎよっとするような業務でも黙々と仕事を進めていける能力があります。今の時点でお客様に出す料理を中尾君に担当させるのは難しいですが、魚や野菜の下処理や食器洗浄など任せられる仕事は多くあります」と話します。

中野支配人は、障害者を雇う企業からすると、就労支援をする機関には、もう少し踏み込んだ支援も必要と指摘します。「障害者が就労し始めて、雇う側が思うような能力でない場合があること、人間関係などの様々な事情でせっかく就労した障害者が辞めていく例は多々あるかと思っています。」

兵庫障害者職業センターでは、障害者の能力評価をしています。雇う前に障害の状態を細かに分析した情報を支援機関からもっと提供してもらえば、企業にとっても雇いやすく、障害者にも就労の可能性が増えるのではないかと考えます。」



▲悠太さんにフランス料理に携わっている仕事への自信を持ってほしいと話す谷料理長

「働きたい」 障害者の想いをつなぐ

「働きたい」と思う気持ち、これは障害者でも健常者でも同じです。障害者の求人数は少ない状況ではありますが、企業等への就職を目指す障害者は多くいます。

害者枠での求人が、なかなか無いのが現状で、可能性のある企業に出向きます。まずは職場実習からでもお願いし、実習を通じて企業に業務への適性を見極めてもらいます。」

職を探して週3〜4回ハローワークに来る人もいます。「働きたいという強い意思を持っている人も多く、なんとか企業には求人を増やしてもらいたい」と、和田さんは願います。

「もし作業中に事故が起きたらどうするのか」「仕事ができるのか」。こういった固定観念がまだ根強く残るのも事実です。しかし、就労をサポートする機関では、保険制度や[※]ジョブ



▲ハローワーク洲本の和田さんは、実習からでも受け入れてくれる企業が増えればと話します

コーチなどのサポート制度を整えているほか、就労の準備段階から職場定着までをいくつかの支援機関がサポート(チーム支援)しています。

ハローワークでは、3か月間のトライアル雇用なども利用し、企業には障害者雇用を今一度考えて欲しいとしています。

ハローワーク洲本、障害者登録者数(21年度末)

区分	登録者数
身体障害者	256人(95人)
知的障害者	86人(42人)
精神障害者	22人
その他	3人
合計	367人

※その他=発達障害や難病の人など
※()内は重度障害者の数

南あわじ市の障害者手帳発行者数(21年度末)

区分	発行者数
身体障害者	2,392人
知的障害者	319人
精神障害者	166人
合計	2,877人

※20年度末合計=2,820人

21年度障害者の紹介・就職件数(ハローワーク洲本)

区分	新規求職申込数	紹介数	就職数
身体障害者	53件(24件)	116件(28件)	32件(10件)
知的障害者	25件(8件)	17件(8件)	11件(9件)
精神障害者	5件	26件	3件
その他	3件	1件	0件
合計	86件	160件	46件

※その他=発達障害や難病の人など
※()内は重度障害者の数



▲毎月行っているセンターの移動相談もぜひ利用してほしいと話す加藤さん



▲障害者の職業相談などを行う窓口(ハローワーク洲本)

障害者の就業や自立を目指す支援

淡路障害者就業・生活支援センターには、島内の障害者約150人が登録されています。就業支援担当の加藤史久^{ふしひさ}さんは、支援センターの支援内容は障害の程度や状態により多岐にわたるといいます。「就労への相談だけではありません。就職後も定期的に状況を確認したり、職場への訪問をしたりして、生活面での悩みや職場での課題を本人や企業と一緒に考えていきます。」

ときには緊急性のある支援もあり、支援する障害者によって一様なサポートはできません。常にケースバイケースの支援が必要になるといいます。

同支援センター内には開設後4年目になる障害者専門職業紹介所もあります。ここでは就労を希望する障害者約120人が登録し、障害者雇用を考える企業などに対して、情報提供を行っています。今年度はすでに17人の就職が決まったといいます。

加藤さんは、「少しの配慮を頂けることで働ける障害者は多くいます。徐々にでも企業が障害者雇用を目を向けてもらえるとう嬉しいです」と、障害者就労への期待を話します。

※1 ジョブコーチ=障害者の就労にあたって、事業主や職場の従業員への助言や、実際に職場へ出向いて職場への適応への支援などを行います

「太田光弘さん」

工賃は月額2万4000円

「僕の目標は「働いて稼いだお金で神輿を担ぐ」——
働くことで仲間とつながり、地域とつながりたい」

「A社では1年。B社では1年半、C社では2年ほど……。いくつかの会社に勤めましたが、気持ちがいしんどくなって長くは続きませんでした。その後は、髪はボサボサ、昼夜逆転した生活で、『自分でも変やなあ』と思いながら、精神面で不安定な毎日が続いていました。」

こう当時を振り返るのは、統合失調症（精神障害）の太田光弘さん（38歳・神代）、9年前の29歳のとき、現在の「ウインズ」を利用し始めました。働くことのできる太田さんは今、体調管理をしながら就労継続支援B型の支援を受けています。

今年の夏、地元・福良の同窓会で、厄年（42歳）になる年に一緒に神輿を



▲焼きたてのメロンパンを店に出す太田さん。メロンパンはやまのパンの一つといひます

のパン作りです。キャラメルメロンパンや夕張メロンパンなど約10種類の

メロンパンを担当します。メ

ロンパン作りには自信がある

という太田さんは、パンの生

地は、丸めていくときにさわ

り過ぎるとふくらみすぎないの

で見極めが肝心といひます。

一度社会人として外に出て

いた太田さんは、「働くこと

は生活のいい刺激になりま

す。規則正しい生活もできる



YAMAYAハウスでの夕食

「グループホームに入居したのは以前の昼夜逆転の生活を改めるため」と話す太田さんは、グループ（ケア）ホーム「YAMAYAハウス」（神代）に入って2年目になります。現在は、3人の障害者と共同生活をしており、毎日順番で掃除やごみの当番があり、仕事が終わった後は決まった時間に食事をとります。栄養管理もされていて、規則正しい生活ができるようになったと太田さんはいひます。



▲太田さんの部屋は3階のワンルーム（10.25㎡）。一人の時間も過ごしやすいといひます



▲利用者の体調を毎日見ながら把握する必要があるという田所主任

います。「統合失調症の人は、一見普通に見えていても、体調が安定しているときとそうでないときがあるんです。太田さんの場合は、体調が悪くなると、気分が高揚してきます。普段より饒舌（じょうぜつ）になっていくときは、悪くなってきたりなど分かります。サインを見逃さないことが体調管理のポイントになります。」

施設に通っている人でも能力が高い人はいます。しかし、就労後のコミュニケーションに不安があったり、仕事に忙しくなるとしんどくなったりする人もいます。ケアを受けながら、得意な面を仕事に生かしてほしい想いがあります」と、田所主任は話します。

※2 就労継続支援B型＝一般就労が難しい人に働く場を提供し、就労への移行に向けた知識や能力の向上のために必要な訓練を行う支援のことをいひます

「農作業で働く」 障害者も同じ労働力

「仕事内容によつては、障害者は十分健常者に通用します。最初からできないという偏見を持つことはないんです。うちのように農業をしているところでは、大きな戦力になっています。」農業生産法人・淡路ゆうき耕房（淡）の曾根治美さんは、倉庫で自家製黒豆の袋を詰めながら話します。

「今、島内は非常に就職難です。うちの子には軽度の障害があり、成長する中で一般就労が難しいと考えました。同じように障害を持っている子どもの居場所や今後成長を見込む事業など考えた結果、3年前に今の会社を立ち上げました。」こう話す曾根さんの会社では、支援学校の実習（職場体験）を受け入れたり、施設などへ仕事を委託したりしながら、玉ねぎやにんにく、



▲「障害者が種植えをしたにんにく畑も2週間ですっかり芽が出ています。逆さに植えると芽は出ないんですが、問題はありませんと話す曾根治美さん

いるんだと徐々に個性もわかってきたといひます。「その後、種植えをしてくれた障害者に収穫の喜びも味わってもらいたいと考え、男手のいる収穫の際も来てもらっています。助かっている気持ち、一人ひとりに必ず『ありがとう』と伝えるようにしています。本人も達



（左）淡路ゆうき耕房の曾根輝宏さんが管理するにんにく畑（右）にんにくの種まきでは、障害者に分かりやすいよう種を植える位置に印を入れた棒を使ひます

成感を一緒に味わってくれているのです。また来たいと言ってくれるのが嬉しいですね」と笑顔で話します。淡路ゆうき耕房では、労働者の賃金は能力給で、障害者でも健常者と変わらず働ける人には、単価を上げて同程度の賃金を支払っています。「本人の作業意欲につながるように、施設と相談して賃金設定を考えました。障害者でも頑張った人には、『これだけもらえる』という気持ちをもってもらいた



▲支援学校の実習生の受け入れ。にんにく剥きをする実習生